



平山 るみ（ひらやま るみ） 准教授

担当科目

教職入門Ⅰ・Ⅱ 教育心理学 教育方法論 教育実習の指導 教職実践演習（中・高）

所属・職位	大阪音楽大学短期大学部 音楽科 准教授
学位	修士（教育学）
学歴	2001 平成 13 年 関西大学文学部教育学科心理学専修 卒業 学士（文学） 2001 平成 13 年 京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻修士課程 入学 2003 平成 15 年 京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻修士課程 修了 修士（教育学） 2006 平成 18 年 京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻博士課程 認定退学
主な職歴	2005 平成 17～2006 平成 18 年 日本学術振興会 特別研究員（DC2） 2006 平成 18～2007 平成 19 年 日本学術振興会 特別研究員（PD） 2007 平成 19～2009 平成 21 年 京都大学教育学研究科 教務補佐員 2009 平成 21～2014 平成 26 年 大阪音楽大学短期大学部 専任助教 2014 平成 26 年～現在に至る 大阪音楽大学短期大学部 准教授
専攻（専門分野）	教育心理学
担当科目	「教職入門Ⅰ」「教育心理学」「特別活動の研究」「教育実習の研究」「教職実践演習（中）」
研究テーマ	心理学の中でも、主に人の思考について研究しています。どうしたら騙されにくくなるのかしら？ 思い込みで判断をしりせず、客観的に多面的に考えることができるようになるためにはどうしたら いいのかしら？と、批判的思考(critical thinking)について研究しています。
教育方針	授業では、知識を身につけてもらうだけではなく、教育において、また日常生活において、それ らをどのように役立てることができるのかといったことを積極的に考えてもらいたいと思います。ま た、人や物事について、客観的にさまざまな角度から理解し、考えようとする力を伸ばしていっ て もらいたいと思います。
所属学会・団体等	日本心理学会、日本教育心理学会、日本教育工学会
最近の業績	著書 ■『ワードマップ 批判的思考：21 世紀を生き抜くリテラシーの基盤』（分担執筆） 2015（平成 27）年 新曜社

証拠に基づき論理的に考えること、自分の考えに誤りや偏りがないか内省することなどを意味する批判的思考は、膨大な情報を適切に読み解き活用できるリテラシーの基盤となる。この批判的思考について、心理学、哲学、科学論などの学問的な基礎から、教授法、活用場面まで、キーワード仕立てで解説している。このうち、批判的思考をどのように測定し評価するかを紹介した「批判的思考力の評価」（30-33 頁）、必要とされる能力やスキルについて紹介した「批判的思考力の認知的要素」（34-37 頁）、必要となる態度や傾向性などの情意的要素について紹介した「批判的思考の態度」（38-41 頁）を執筆した。

■『科学技術をよく考える：クリティカルシンキング練習帳』分担執筆 2013（平成 25）年
名古屋大学出版会

「生きる力」を育むうえで重要とされるクリティカルシンキングを育むための練習帳である。遺伝子組換え作物、地震予知等々、現代社会に生きる上で必要不可欠な科学技術をテーマとした現実に即した課題設定をしており、思考力に加え、現代を生きるうえで必要な、さらに未来を創り上げていく子どもたちの教育に携わるうえでも必要となる知識を得ることができる。情報を読み解き考えるために必要なスキルのうち、思い込みによる思考の歪みについての「確証バイアスと利用可能性バイアス」（208-212 頁）および思い込みに捉われず情報を正しく理解するためのツールについての「四分割表と錯誤相関」（212-218 頁）、新たな知識や発見を作り上げていくための「予断の必要性」（223-227 頁）について執筆した。

■『批判的思考力を育む：学士力と社会人基礎力の基盤形成』（分担共著）2011
（平成 23）年 有斐閣

情報を鵜呑みにせず、深く吟味し正しく理解するための批判的思考力は、「生きる力」「ジェネリックスキル」として初等中等、そして高等教育においてその育成が重要視されている。第 1 部では、批判的思考のメカニズム、発揮しやすい条件、測定・評価の方法等に関する理論を、日本という文化の特質、現代の社会、学生の実情もふまえての解説し、第 2 部では、実際の授業実践とそこから導き出された「育成のポイント」を紹介している。このうち、教育方法の発展のために必要な教育評価に関わるものとして、批判的思考力および批判的思考を支えるといわれる態度や能力のさまざまな測定法について紹介した。（第 1 部第 6 章「批判的思考の測定：どのように測定し評価できるか」を共同執筆、平山るみ・楠見孝、110p-134p）

■『Critical Thinking：情報を吟味・理解する力を鍛える』（分担執筆） 2010
（平成 22）年 株式会社ベネッセ i-キャリア

急速に変化し、さまざまな課題に直面する社会で必要とされる批判的思考力を育むための教材である。各章、批判的思考が必要とされる場面の身近な事例、エクササイズを含む批判的思考の解説、日常生活や専門教育の中でどのように生かせるかを学ぶ応用問題とで構成した。3 章から構成されており、批判的思考に必要な主張や根拠の同定といった議論の明確化のスキル、暗黙の前提を理解するスキル、根拠の確かさの判断するスキルを教授し高める内容となっている。このうち、根拠がどれくらい確かであるかを考えるための観点や方法について解説を執筆し、問題を作成した（第 3 章「根拠の確かさ」、39-54 頁）。（楠見孝、子安増生、道田泰司、林創、平山るみ）

■「食品リスク認知を支えるリスクリテラシーの構造：批判的思考と科学リテラシーに基づく検討」(共著) 2013 (平成 25) 年 日本リスク研究学会誌、第 23 巻、3 号

食育基本法において、教員も正しい食についての知識をもち、指導していくことが求められているが、そのためには食品リスクリテラシーが求められる。そこで、人は食品についてどのような知識を持ち、リスクを判断しているのか、そして、適切な判断を行うための食品リスクリテラシーの獲得には、どのような要因が影響するのかについて検討した。1500 名の市民を対象に調査を実施し、熟慮的思考スタイル、批判的思考態度、学歴、リスク知識、科学リテラシーと食品リスクリテラシーの構造にどのように関わるかを明らかにした。その結果、熟慮的思考スタイルおよび学歴が、批判的思考態度に直接的に影響していた。批判的思考態度は、科学リテラシーと、メディアへの接触および食品リスク情報理解を介して、食品リスク知識に影響していた。批判的思考態度が、食品リスクリテラシーの獲得において重要な役割を果たしていることが示された。(165-172 頁) (楠見孝、平山るみ)

■「批判的思考力を育成する大学初年次教育の実践と評価」(共著) 2012 (平成 24) 年認知科学、第 19 巻、1 号

「生きる力」「ジェネリックスキル」の中核を成すものとして批判的思考教育の重要性が唱えられるようになってきており、その教育方法を充実させることが課題となっている。そこで、大学入学後の初年次教育を通じての批判的思考を育成するための授業を行い、学生の批判的思考を測定し、授業評価を行った。批判的思考についてのジェネラルアプローチを行い、また日常への転移を目指したワークシートを作成し実施した。また、メタ認知育成のための自己評価も毎回実施した。さらに、協調的学習に基づく、学習者インタラクションを重視したディスカッションやピア・リーディング等の学習活動を取り入れた。また、批判的思考の態度やスキルそれぞれに関わる 3 種類の教科書を使用した。そして、批判的思考態度尺度、批判的思考能力テスト、討論参加態度尺度、批判的思考遂行のメタ認知尺度によって効果測定を行った。その結果、批判的思考に関わる態度やメタ認知において、授業の前後で変化がみられた。(69-82 頁) (楠見孝、平山るみ、田中優子)

■「日本語版認識論的信念の尺度構成と批判的思考態度との関連性の検討」(共著) 2010 (平成 22) 年日本教育工学会論文誌、第 34 巻、増刊号

知識や学習とはどのような性質を持つものかという認識論的信念は、通常授業や特別活動を含む、さまざまな場面で培われると考えられる。その認識論的信念を評価できるツールとして、SCHOMMER (1990)の認識論的信念尺度に基づいて、日本語版認識論的信念尺度を構成した。大学生 426 名に対して調査をおこない、「生得的な能力」、「じっくりした学習」、「自己努力による学習」、「単純な知識」の 4 因子から成る日本語版認識論的信念尺度を構成した。これにより、「関心、意欲、態度」を支える認識論的信念を検討し、子どもたちのもつ認識論的信念を踏まえた授業を構成していくことが可能となった。さらに、この尺度を用いて認識論的信念と批判的思考態度との関連性を検討したところ、認識論的信念の「生得的な能力」、「じっくりした学習」、「自己努力による学習」と、批判的思考態度との間に、有意な相関がみられ、どのような認識論的信念をもつかが批判的思考態度と関連していることが明らか

となった。これらのことから、どのような認識論的信念を獲得することを学校教育全般を通じて支援していくことが重要であるかといった教育目標について示した。(157-160 頁) (平山 るみ、楠見孝)

■「日本語版批判的思考能力尺度の構成と性質の検討 :

コーネル批判的思考テスト・レベル Z を用いて」(共著) 2010 (平成 22) 年 日本教育工学会論文誌、第 33 巻、4 号

近年、「生きる力」を支える要素の一つとして、中等教育や高等教育において、批判的思考育成の試みがなされている。しかし、それらの教育評価を行うための尺度は、日本にはほとんど存在しない。そこで、コーネル批判的思考テスト・レベル Z (Ennis, et al. 1985)を用いて、日本語版批判的思考能力尺度を構成した。大学生 43 名に対し、批判的思考能力尺度、批判的思考態度尺度、認知能力尺度を実施し、尺度について検討した結果、尺度の内的整合性が得られ、課題の難易度は適切であることが確認された。また、批判的思考能力尺度得点と言語性認知能力尺度得点との相関から、この尺度には言語能力が関わることが示された。そして、批判的思考能力尺度と批判的思考態度尺度とは関係性がみられず、独立した尺度であることが示された。これにより、批判的思考能力を教育目標とした場合に、事前の生徒・学生たちの批判的思考能力の現状を把握したり、教育の成果を測定したりすることが可能となったと考えられる。(441-448 頁) (平山るみ、田中優子、河崎美保、楠見孝)

■「健康食品の効能とリスク判断に及ぼすサンプルサイズ情報の影響」(共著) 2009 (平成 21) 年 日本リスク研究学会誌、第 19 巻、1 号

健康やリスク情報等、食品に関する情報が溢れているが、その中には疑似科学的情報も含まれていることが問題視されている。科学リテラシー、情報リテラシーとしてこれらの情報を正しく理解、判断し活用する力を育むことが食育という観点からも求められている。そこで、自身の身体イメージへの関心が特に高い青年期である大学生に対して調査を実施し、痩身効果を謳った健康食品の効能やリスクを判断する際、サンプルサイズに関する情報がどのように影響するか検討した。その結果、サンプルサイズによってその情報の判断は異なるものであるという知識は持っており、リスク情報判断の際はサンプルサイズを考慮できる。しかし、痩身効果というベネフィット情報を判断する際には、サンプルサイズ情報を無視し、効果を判断する傾向があることが明らかになった。より正しく理解、判断する力を育むためには、食育や科学リテラシー教育において、サンプルサイズなどの科学的知識のみではなく、ベネフィット情報に触れた際の欲求の影響といった心理学的な知識も提供することが必要なことを示した。(43-48 頁) (平山るみ、楠見孝)

■「大学初年次教育におけるグループ学習と討論 : クリティカル・シンキング育成の試み」(共著) 2006 (平成 18) 年筑波大学学校教育学会誌、第 13 号

欧米圏においてはクリティカル・シンキング教育の重要性が認識され、さまざまな教育実践が行われており、その教育効果や育成に関わる要因に関する検討も行われている。日本においても、教育実践例の報告はまだ少なく、また質的および量的に多面的に教育評価を行った研

究は少ない。しかし、教育方法の改善のためには、単にさまざまな授業実践を行うだけでなく、評価までを一貫して行うことが重要である。そこで、半期間の初年次教育において、講義やグループでの調べ学習やディスカッションといったさまざまな教育方法を通じて、クリティカル・シンキングの育成を試みた。その結果、批判的思考態度においては、授業の事前事後で有意な差はあまりみられなかったが、討論形態や態度については上昇した。また、最終レポート課題においては、クリティカルな態度に言及するものも多く、これらはクリティカル・シンキングへの態度形成が促進されたものと考えられる。このように教育実践から評価までを一貫して行い、「生きる力」に関わるクリティカル・シンキングのより効果的な教育方法を示した。(1-15 頁) (武田明典、楠見孝、平山るみ)

■「批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響：証拠評価と結論生成課題を用いたの検討」(共著) 2004 (平成 16) 年 教育心理学研究、第 52 巻、2 号

情報化社会では、玉石混合さまざまな情報があふれており、それらを正確に理解し判断し活用する情報リテラシーが必要とされる。情報リテラシーには批判的思考が関係しているが、より効果的な批判的思考の教育方法を検討するためには、まずは批判的思考の遂行にどのような要因が関わっているのかを明らかにする必要がある。また、「関心・意欲・態度」や「思考・判断・表現」が重視されているものの、そもそも批判的思考の態度を測定するためのツールが日本には存在しない。そこで、まず批判的思考態度を測定するための評価ツールとしての尺度を、調査によって作成した。その結果、「論理的思考への自覚」「探究心」「客観性」「証拠の重視」の 4 因子から成る尺度が構成された。さらに、対立する情報からの結論を導くプロセスにおいて、信念バイアスや確証バイアスを回避し、情報を客観的・多面的に評価することに対して、批判的思考態度が及ぼす影響を検討した。その結果、確証バイアスの回避に、批判的思考態度の「探究心」が関わることが示され、自分が持つ考えに反する情報をも公平に検討する情報リテラシー育成のためには、さまざまな情報を求めようとする態度を育むことが重要であることが示された。(186-198 頁) (平山るみ、楠見孝)

■「リスクコミュニケーションにおける対立情報回避：放射能・食品リスクに関する情報源信頼性とリスク認知」(共著) 2014 (平成 26) 年日本心理学会第 78 回大会発表論文集 (於：同支社大学) (楠見孝、平山るみ、嘉志摩佳久)

■「SNS への態度と批判的思考態度および熟慮性との関係性」(共著) 2014 (平成 26) 年 日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集 (平山るみ、楠見孝)

■「放射能リスクに関する対立情報の統合：片面－両面提示情報源の信頼度」(共著) 2013 (平成 25) 年日本心理学会第 77 回大会発表論文集 (於：神戸大学) (215 頁) (楠見孝、平山るみ、嘉志摩佳久)

■「ジェネリックスキルとしての批判的思考力テスト：得点パターンにもとづく認知的特徴の検討」(共著) 2013 (平成 25) 年日本テスト学会第 11 回大会発表論文集 (148-151 頁) (田中優子・鈴木雅之・孫媛・子安増生・道田泰司・林創・平山るみ、楠見孝)

■「芸術系短大教養科目を通じての批判的思考態度の育成」(共著) 2013 (平成 25) 年日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集 (平山るみ、楠見孝)

■「情報不十分文章に対する批判的思考における専攻の影響」(共著) 2012 (平成

- 24) 年日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集 (於: 琉球大学) (平山るみ, 楠見孝)
- 「批判的思考態度および思考スタイルの領域性: 音大生を対象として」(共著) 2011 (平成 23) 年 日本教育心理学会第 53 回総会 (於: 北海道学校心理士会・北翔大学) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「ジェネリックスキルとしての批判的思考力テストの開発: 大学偏差値, 批判的学習態度, 授業履修との関連性の検討」(共著) 2010 (平成 22) 年日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集 (於: 早稲田大学) (661 頁) (楠見孝, 子安増生, 道田泰司, 林創, 平山るみ, 田中優子)
 - 「市民の食品リスクリテラシーの構造: 学歴と批判的思考態度の影響」(共著) 2009 (平成 21) 年日本心理学会第 73 回大会発表論文集 (於: 立命館大学) (86 頁) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「健康食品の効果と副作用判断に及ぼすサンプルサイズ情報の影響」(共著) 2008 (平成 20) 年日本心理学会第 72 回大会発表論文集 (於: 北海道大学) (951 頁) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「高校国語科における批判的読解指導効果」(共著) 2007 (平成 19) 年日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集 (於: 文教大学) (63 頁) (楠見孝, 平山るみ, 田中優子, 富江宏)
 - 「批判的思考と科学および情報リテラシーとの関連性」(共著) 2007 (平成 19) 年日本心理学会第 71 回大会発表論文集 (於: 東洋大学) (842 頁) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「科学的情報の判断に関わる知識および批判的思考」(共著) 2006 (平成 18) 年日本心理学会第 70 回大会発表論文集 (於: 九州大学) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「批判的思考能力と科学的リテラシーがリスク認知に及ぼす効果」(共著) 2006 (平成 18) 年日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集 (於: 岡山大学) (258 頁) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「The effects of critical thinking and information monitoring process on the conclusion drawing from contrary information」(共著) 2005 (平成 17) 年 6th Annual Meeting, Society of Judgment & Decision Making (於: Toronto, Canada) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「批判的思考態度および能力と健康情報の判断との関係性」(共著) 2005 (平成 17) 年日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集 (於: 浅井学園) (512 頁) (平山るみ, 田中優子, 山縣宏美, 楠見孝)
 - 「認識論的信念と批判的思考との関連性の検討」(共著) 2005 (平成 17) 年日本心理学会第 69 回大会発表論文集 (於: 慶応義塾大学) (901 頁) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「The effect of one's disposition and ability on critical thinking process」(共著) 2004 (平成 16) 年 25th Annual Conference, Society of Judgment & Decision Making (於: Minneapolis, USA) (平山るみ, 楠見孝)
 - 「批判的思考態度が対立情報の探索過程に及ぼす効果」(共著) 2004 (平成 16)

	<p>年日本教育心理学会第46回総会発表論文集（於：富山大学）（510頁）（平山るみ、楠見孝）</p> <p>■「批判的思考能力と知能および態度との関連性：コーネル批判的思考テストを用いての検討」（共著）2004（平成16）年日本心理学会第68回大会発表論文集（於：関西大学）（873頁）（平山るみ、田中優子、河崎美保、楠見孝）</p> <p>■「クリティカル・シンキングを用いた大学演習授業：態度および課題成績からの検討」（共著）2003（平成15）年日本教育工学会第19回全国大会発表論文集（於：岩手県立大学）（375-376頁）（平山るみ、武田明典、楠見孝）</p> <p>■「クリティカル・シンキングを用いた大学演習授業：実践報告」（共著）2003（平成15）年日本教育工学会第19回全国大会（於：岩手県立大学）（377-378頁）（武田明典 楠見孝）</p> <p>■「批判的思考を支える態度が読解プロセスに及ぼす影響」（共著）2003（平成15）年日本心理学会第67回大会発表論文集（於：東京大学）（905頁）（平山るみ、楠見孝）</p> <p>■「批判的思考態度と課題成績との関連性：ワトソン・グレーザー課題と読解力リテラシー課題を用いて」（共著）2002（平成14）年日本教育心理学会第44回総会発表論文集（於：熊本大学）（260頁）（平山るみ、楠見孝）</p> <p>■「批判的思考を支える態度と個人特性との関連性」（共著）2002 平成14年日本心理学会第66回大会発表論文集（於：広島大学）（825頁）（平山るみ、楠見孝）</p> <p>その他</p> <p>■（自主企画）「批判的思考態度尺度の基礎研究と教育実践への利用可能性」における話題提供『批判的思考の測定尺度研究の成果～批判的思考態度研究から批判的思考教育を考える～』（単著）2011（平成23）年日本教育心理学会第53回総会（於：北海道学校心理士会・北翔大学）</p> <p>■「市民の食品リスク・リテラシーの構造：学歴と批判的思考態度の影響」（共著）2010（平成22）年科学研究補助金（基盤（A））助成研究報告書 課題番号19208021 科学を基礎とした食品安全行政／リスクアナリシスと専門職業、職業倫理の確立（最終報告書）（113頁-128頁）（楠見孝、平山るみ）</p>
教育実践記録等	<p>■『大学教育および教職課程における批判的思考育成の重要性』（単著）2014（平成26）年 大阪音楽大学教育研究論集</p> <p>■『批判的思考を支える態度および能力測定に関する展望』（単著）2004（平成16）年 京都大学教育学研究科紀要，50巻（290-302頁）</p>

大野 僚（おおの りょう） 准教授

担当科目

教育学概論Ⅰ 教育学概論Ⅱ 教育方法論

所属・職位	
学位	文学（博士）
学歴	2002（平成14）年 大谷大学文学部 社会学科教育学分野 卒業 文学（学士） 2004（平成16）年 大谷大学大学院文学研究科修士課程 哲学専攻教育学コース 修了 文学（修士） 2007（平成19）年 大谷大学大学院文学研究科博士後期課程 哲学専攻教育学コース 満期退学 2008（平成20）年 大谷大学大学院文学研究科博士後期課程 哲学専攻教育学コース 博士後期課程単位取得 文学（博士）
主な職歴	2005（平成17）年大谷大学文学部ティーチングアシスタント 2007（平成19）～2009（平成21）年 大谷大学文学部 任期制助教 2009（平成21）～ 年 大谷大学短期大学部 非常勤講師 2010（平成22）～ 年 大谷大学 非常勤講師 2010（平成22）～2011（平成23）年 大阪教育大学 非常勤講師 2011（平成23）～2014（平成26）年 大阪経済法科大学 非常勤講師 2011（平成23）年～現在に至る 大阪音楽大学 非常勤講師 2011年（平成23）～現在に至る 神戸女学院大学 非常勤講師 2014（平成26）年～2015（平成27）年 高田短期大学 助教
専攻（専門分野）	教育学、臨床教育学
担当科目	「教育学概論Ⅰ」「教育学概論Ⅱ」「教育方法論」
研究テーマ	戦後教育思想における教育言説の分析
教育方針	幅広い教養を身につける
所属学会・団体等	関西教育学会、日本教育学会、教育哲学会、教育方法学会
最近の業績	<p>著書</p> <ul style="list-style-type: none"> ■「教育と方法—教育評価における原理と方法—」川村覚昭編著『教育の根源』（共著）2011（平成23）年晃洋書房刊 <p>教育活動における評価のなかでも、特に授業評価における諸理論を教育方法論の観点から初学者にも理解しやすいように整理した。教育評価の歴史的変遷に関して制度と原理を紹介し、それぞれの評価の特徴と教育方法学的な課題を指摘した。また、ポートフォリオなどの近年注目されている評価の理論を紹介することで、評価や評定に関する新たな授業評価の動向があることを明らかにした。第七章（105～123頁）を担当。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■『上田薫の人間形成論—新しい教育言説の誕生』（単著）2011（平成23）年学術出版会刊 <p>戦後初期の教育思想を代表する事例として上田薫の社会科教育と道徳教育に見られる教育思想や教育方法に注目した。本書では、彼の人間形成論が教育言説として新たな地平を開くことを、臨床教育学の方法論であるテキスト解釈を参考にし、社会科教育と道徳教育の具体的な教育方法やカリキュラムを入口にして、教育に見られる特有の論理を探り当てること</p>

	<p>ができた。具体的には、彼特有の語りの構造を、特に「経験」概念に焦点化して最新のレトリック研究を方法論に用いながら、従来の経験主義の思想と異なって際立った特質を有していることを論証した。</p>
<p>学術論文等</p>	<p>■「向山洋一の教育論—その語りの形式—」（単著）2005（平成 17）年『関西教育学会紀要』第 29 号</p> <p>向山洋一と斎藤喜博の教育論の「まちがいの授業」を比較検討することで、両者の教育論の違いを検討した。向山の教育論は、多様であるはずの教育技術をマニュアル化していくことで、教育技術とは呼べない瑣末なものまでをも「教育技術」として定着させようとしたことを明らかにした。また、向山の語りの手法が誇張と強調によって説得力をもたせようと試みていることを分析した。</p>
<p>教育実践記録等</p>	<p>■『方法としての子ども研究—経験カリキュラムにおける実践記録を中心に—』2014 年 2 月 大阪音楽大学教育研究論集（67～75 頁）</p> <p>学校教育において望ましい子どもの成長や特性を育むために工夫されたカリキュラムにて取り組みを行っている実践を参考にして、子どもに対する多様な研究の特徴について考察した。その際に、経験主義教育のカリキュラムの実践記録を事例として、子ども特有の理解の仕方や教師の子ども理解に対する視点を読み取ることで子ども研究として展開されていることを明らかにした。</p> <p>■口頭発表「授業における「カルテ」の有用性」2008（平成 20）年"平成 20 年度大谷大学哲学会秋季研究会</p> <p>「カルテ」という教育技術が授業場面で活用されることで、子どもを理解する手がかりになると同時に、「カルテ」の有効性が授業を離れた後も人間理解の手法として成立していることを提示した。「カルテ」は授業における実践的な技術として成立しているだけでなく、教師や子どもを含めた学級および、学校活動における人間理解を捉え直すことのできる方法でもあった。</p>

串崎 真志（くしざき まさし） 講師・関西大学文学部総合人文学科教授

担当科目

生徒指導論 I（教育相談を含む）

<p>所属・職位</p>	<p>関西大学文学部総合人文学科教授</p>
<p>学位</p>	<p>博士（人間科学）大阪大学</p>
<p>学歴</p>	<p>1993（平成 5）年 愛媛大学法文学部文学科心理学専攻卒業</p> <p>1999（平成 11）年 大阪大学大学院 人間科学研究科 教育学専攻 博士課程後期課程修了</p> <p>2000（平成 12）年 総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻 博士課程後期課程中途退学</p>
<p>主な職歴</p>	<p>2000（平成 12）～2004（平成 16）年 同志社女子大学生生活科学部 人間生活学科専任講師</p> <p>2004（平成 16）～2007（平成 19）年 関西大学文学部総合人文学科助教授</p> <p>2007（平成 19）～2011（平成 23）年 関西大学文学部総合人文学科准教授</p>

	2011（平成 23）年～ 関西大学文学部総合人文学科教授（現在に至る）
専攻（専門分野）	心理学（臨床心理学）
担当科目	生徒指導論 I（教育相談を含む）
研究テーマ	カウンセリング場面におけるカウンセラーとクライアントの相互的な影響過程をふまえた心理療法論、セルフケア、共感的理解、治療的变化についての基礎研究
教育方針	各種教材や体験課題を通して自己理解力（自分をふりかえる力）を養い、それをもとに生徒を理解できるように工夫している
所属学会・団体等	日本心理学会、日本心理臨床学会、日本人間性心理学会、日本箱庭療法学会、日本認知・行動療法学会
最近の業績	<p>著書</p> <ul style="list-style-type: none"> ■『子どもの発達障害・適応障害とメンタルヘルス』（共著）2010（平成 22）年ミネルヴァ書房刊 「学業不振児の心理学的理解と支援」を担当。学業不振の児童生徒に対して自己調整学習（自分自身の学習状況について知ること）を促すアプローチを概説し、後半では虐待によって情緒発達が歪み、そこから学業不振に陥っている事例を考察した。 ■『絶対役立つ教養の心理学』（共著）2009（平成 21）年ミネルヴァ書房 「第 8 章人を支える、人に支えられる」p.189～209 を担当。カウンセリングを受ける立場からカウンセリングについて概説した。カウンセリングの申込み方、そのプロセス、よいカウンセラーの見分け方などについて述べた。 ■『健康と暮らしに役立つ心理学』（共著）2009（平成 21）年北樹出版 「第 10 章自分をみつめる方法」p.113～p.122 を担当。対人援助職にある人が仕事のストレスを自分でどのようにケアするか、その具体的な方法を解説した。ストレスに悩み、精神疾患を余儀なくされる教師は多い。これから教師を目指す大学生は、ストレスを自分でケアできる資質をぜひ備えておくことが望ましい。そのようなセルフケアの方法について解説した。 ■『カウンセリングとソーシャルサポート』（共著）2007（平成 19）年ナカニシヤ出版 「第 1 章カウンセリングとサポート活動：カウンセラーが地域で活動するために必要な 6 つのこと」p.3-16 を担当。事例を通して地域で活動するためには何よりも即時性（フットワークのよさ）が必要であることを指摘した。そして状況を良く見て判断すること、ときには状況の流れに判断を委ねてみるのが物事を展開させることを示唆した。 ■『暮らしに活かす福祉の視点』（共著）2006（平成 18）ミネルヴァ書房 「第 6 章子どもの成長と地域における子育て支援」p.107～122 を担当。被虐待児童生徒の回復及び親に対する再発防止を目指す、学校、行政、地域（民生委員等）の地域連

教育実践記録等	<p>携システムの取り組みを紹介した。</p> <p>■『研究論文で学ぶ臨床心理学』（共著）2006（平成 18）年ナカニシヤ出版 「第 3 章遊戯療法」を担当。子ども中心プレイセラピーの立場、アドラー派、親子療法のそれぞれについて研究論文を要約しながら紹介した。</p> <p>■『地域実践心理学〔実践編〕』（共著）2006（平成 18）年ナカニシヤ出版 被虐待児童生徒に対して自然の中で共同生活することで豊かな自然体験と生活指導を目指す「キャンプ療法」、自閉症や発達障害をもつ子どもに対して豊かな情緒の育成を目指す「音楽療法」、不登校児童に対する居場所づくりなど、コミュニティー（地域と学校・専門家とボランティア）の取り組みを紹介した。</p> <p>■「キャンプ療法における運営の工夫」（単著）2006（平成 18）年「平成 17 年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書」（関西大学大学院社会学研究科）p.41-48 被虐待児童生徒に対して自然の中で共同生活することで生活指導と豊かな自然体験を目指す「キャンプ療法」について、その運営の工夫について述べた（企画と予算、ロケーションとプログラム、スタッフとボランティア、集合と解散、病気とケガ、トラブルとその対処、子どもの成長など）。</p> <p>■「日常的支えが主観的幸福観に及ぼす影響」（共著）2006（平成 18）年「平成 17 年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書」（関西大学大学院社会学研究科）p.189-202 日常的支え尺度を作成し、心理的支え、意地、主観的幸福感との関連を検討した。日常的支えが主観的幸福感、心理的支え、意地の各変数に影響しちえているというモデルが得られ、日常の小さなやりとりが、私たちを大きく勇気づけていることが示唆された。</p> <p>■「意地尺度（短縮版）の作成」（共著）2006（平成 18）年「平成 17 年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書」（関西大学大学院社会学研究科）p.177-187 意地を張りやすい程度の個人差を測る尺度を作成し、素直になれない状態から、頑固の段階を経て、意志の強さに変化するという個人内の過程を示した。</p> <p>■「クラスター分析で見た意地の 4 種類」（共著）2006（平成 18）年「千里山文学論集」（関西大学大学院文学研究科院生協議会）p.91-100 意地を張りやすい状況についての基礎研究。素直でない自分が前面に出てしまうと、自分の気持ちを引くに引けず意地を張ることになる。それは裏返せば「理解されたい」という気持ちの一形態であると示唆された。</p> <p>■「テーマプロジェクト『地域実践心理学』この一年の経過報告」（共著）2006（平成 18）年「関西大学文学論集」p.101-109 関西大学文学部で 2005 年から実施したテーマプロジェクト「地域実践心理学」（専修枠を</p>
---------	--

	<p>超えた心理学教育の試み) について、大学内における大学生のための居場所 (コミュニティ) づくりの試み、地域社会の問題に対して臨床心理学からのアプローチの可能性を紹介した。</p>
その他	<p>■ 2000 (平成 12) 年～現在に至るまで 年 2 回実施される「ひきこもり等児童宿泊等指導事業」(厚生労働省による事業で児童相談所が実施する、不登校の子どもの生活指導と豊かな自然体験を目指す) に参加し、子どもの理解と支援についての助言 (スーパービジョン) を行っている。</p> <p>■ 2006 (平成 18) ～2009 (平成 21) 年 学部生・大学院生が中心となり地域の自閉症のこどもたち 4 人に対して、ほぼ毎月 1 回、行動療法に基づく言語形成やソーシャルスキルトレーニングのプログラム、宿題などの学習補助等の支援を行った。</p> <p>■ 2005 (平成 17) ～2009 (平成 21) 年 大阪府吹田市内の小中学校で、ゼミ受講生がほぼ毎週 1 回、当該小中学校にボランティアとして参加し、主に発達障害をもつ児童生徒の教科指導の補助や運動会などの学校行事の補助を行うことにより、教育現場で子どもの気持ちを理解し支援する方法を学ばせた。</p> <p>■ 1995 (平成 17) 年～2008 (平成 20) 年まで 週 1 回津市家庭児童相談室において、家庭相談員として相談業務を行った。</p>

白川 義夫 (しらかわ よしお) 講師

担当科目

教職実践演習 (中・高)

所属・職位	大阪音楽大学 非常勤講師
学位	教育学士
学歴	1973 (昭和 48) 年 大阪教育大学教育学部体育学科卒業
主な職歴	<p>1973 (昭和48) ～1977 (昭和52) 年 大阪市立生野養護学校教諭</p> <p>1977 (昭和52) ～1987 (昭和62) 年 大阪市立生野工業高校教諭</p> <p>1987 (昭和62) ～2001 (平成13) 年 大阪市立東商業高校教諭</p> <p>2000 (平成12) 年～現在に至る 大阪音楽大学 非常勤講師</p> <p>2001 (平成13) ～2006 (平成18) 年 大阪市立難波養護学校教諭</p> <p>2008 (平成20) 年 大阪市立学校教員を退職。宗教法人法圓寺(真宗大谷派) 住職・保護司</p> <p>2009 (平成21) ～2010 (平成22) 年 和歌山大学大学院 非常勤講師</p> <p>2011 (平成23) ～2012 (平成24) 年 和歌山大学大学院非常勤講師</p> <p>2012 (平成 24) 年～現在に至る 和歌山大学大学院非常勤講師</p>
専攻 (専門分野)	保健科教育法 体育科教育法 特別支援教育 発達論 地域史
担当科目	「教職実践演習 (中・高)」

研究テーマ	<p>生涯発達論 地域史・地域論</p> <p>知的障害養護学校、高校、大学、特別支援学校、大学院での教育実践を経て、現在住職・保護司として地域の熟年者、高齢者との地域活動、終末期の対話、青年・成人の保護観察等に関与している。郷土史研究やまちづくり活動を通じ、地域社会で多様な方々と広義の生涯学習活動の場を持っているが、新たな出遇いや発見から学ぶことの喜びと生長は年齢を超えて共通している。機に応じ様々な異質・異年齢の学習集団を組織できること自体を地域の資源として、生涯というスパンで住民がどのように相互発達の関係を築いていけばよいのか。地域住民の歴史的イデンティティーの形成を手掛かりに実践的に検証する。</p>
教育方針	<p>学ぶ主体を重んじ、対話と学生同士の討論により、自ら設定したテーマに自ら探究活動を組織するクラスづくりをする。独習と共習を織り交ぜ、互いの発表と提案によって新たな発見のある探究活動となるよう支援する。早い段階で最終成果の発表に全員が主体的に関わる動的なプレゼンを求め、ゴールイメージに導かれて活動の筋道と論理の一貫性を大切にすよう促す。</p>
所属学会・団体等	なし
最近の業績	<p>著書</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 『寶圓寺のあゆみ』白川俊義名で発表（共著）2011（平成23）年寶圓寺平成の大修復記念誌編集委員会 <p>現存する享保十五(1730 年)築の寶圓寺本堂の解体修復工事(平成の大修復)落慶記念誌。解体工事で明らかになった事実とこの間の文書の発掘調査に基づき、喜連門徒団の生成・発展過程を縦軸に、地域史を論証。身近な帰属集団の帰属意識の起源を併せて問うた。工事のあゆみ・寶圓寺のあゆみ・喜連村のあゆみの三部構成。全132 頁。大人が力を合わせた時どのようなことができるのか、建物の大修復が地域連帯の復興でもあるひとつの実証実践。大阪音大の先生方のご支援で落慶記念コンサートを折からの大震災の被災者支援コンサートに切り替えた。慶事にも危機にも音楽の力は大きかった。満座の本堂に地域の連帯がいっそう深まったことを誰もが感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「喜連村小史」白川俊義名で発表 2010（平成22）年連 4 連合町会編集・平野区役所発行『喜連 伎人（くれひと）の歴史・暮らし・まちの誇り』全 1 6 頁 <p>月例会を中心に古老聞き取り、お蔵入りの古文書調査、年 2 回の喜連村歴史ウォーク、近隣地域の発掘成果情報の整理など、公開性の高い手法で蓄積した喜連村史の会の研究成果を凝縮し、古代から近現代までの地域の歴史を抄録。町会を通じ喜連住民に全戸配布された。忘れ去られようとしていた古地名と旧蹟を採録した「喜連村字・史跡地図」は住民の記憶を呼び覚まし、歴史・文化の街づくりをめざす喜連環濠地区まちづくり研究会(大阪市認定まちづくり団体)の結成を促した。住民が楽しく学びながら地域の教育力を高めていく方法はある。やがて市民、地域の主体となる学生に見通しを得てもらうことを願う。(p.12～15)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「大阪にあった伎人郷息長河－喜連村史の地誌的・地名考古学的考察」白川俊義名で発表2009（平成21）年『大阪春秋』新風書房(大阪)刊 <p>万葉集4457 番に「にお鳥の 息長河は絶えぬとも 君に語らむ 言尽きめやも」と詠われる息長河おきながわ）が、国文学の上では近江息長川とされている。この歌が万葉集詞</p>

書きの通り「河内国伎人郷馬史国人邸」で詠まれたものであることを、大伴家持ほか一連の6首に詠まれた情景の分析と古地名調査、現地の地誌的研究と照合しながら大阪の現今川上流域（伎人郷）に実在したことを論証。住民の歴史的アイデンティティーの尊重と形成によって中高年になっても仲間意識というものは育つ。教師の目からは見えないこのような力が地域の学校をも支えている。教職をめざすものが地域を視野に収めることを促す。

■ 『「発達障害児の運動発達の最近接領域を探る」旧姓榊原義夫名で発表（共著）

2008（平成20）年土井捷三編『ヴィゴツキー学』第9巻 ヴィゴツキー学協会刊
発達障害児に往々見出される「うまい・へた」次元を超えた不器用さを、運動LD（発達性協調運動障害）と捉え再観察分析。体幹からの順序立てた療育で不器用さは改善されることを特別支援学校での自立活動実践によって実証。不器用さは身体の定位や空間知覚など入力系の困難に起因すると思われ、直観的課題提示が大切なため、アフォーダンス論に立つ体育学習の有効性と可能性を説く。障害児からへたな子まで一般性を持つ指導法を提起。教員としてどの子どもできるようにする手立てを示す。（p.73～89）

■ 第3章 領域編：保健学習実践例2 「構造改革」と職業高校での労働災害の実践

旧姓榊原義夫名で発表（共著）2004（平成16）年学校体育研究同志会編『教師と子どもがつくる 体育・健康教育の教育課程試案2』創文企画（東京）
90年代の一連の労働法制「改正」後の情勢の中で就職活動を目前にした職業高校生に行った実践。骨折や大けがなど一般的な労災のみならず、リストラから過労死までが、実際の親取材レポートに続出し、日本の労働者情勢の悪化に、生徒達と胸を詰ませながら「下流社会」の展望を模索するような実践となった。高校生の社会的視点はいつそう鋭くなっている。それは不幸な変化ともいえる。雇用情勢悪化のしわ寄せを一方向的に受ける新規学卒者に最も身近な事例によって労働情勢の構造的な理解を迫る。（p.189～195）

■ 第2章 子どもの「労働・進路教育」とジェンダー第3節 生きて働く—規制緩和時代の

労働の教育とジェンダー—共著"旧姓榊原義夫名で発表 2004（平成16）年橋本紀子編『ジェンダーと教育の現在』民主教育研究所（東京）全309頁
中島みさき他10名と共著。「労災の学習から労働現場のジェンダー構造をあぶりだし、生徒自ら、性差別の存在に気づき、他の労働問題との関連性を意識しています。ジェンダー構造とその背景を知ること、働くことのすばらしさを守るために社会のあり方を問い直す方向へ、生徒の視線が自然に向かっています」（中島みさきの编者コメント）。やがて労働現場の一員となる学生に、労働そのものの学びを通して、女性参画社会を深部で規定するジェンダー性にまで目を向けるよう誘う。（p.179～194）

学術論文等

■ 「ZPDと教育実践」旧姓榊原義夫名で発表2007（平成19）年ヴィゴツキー学協会第7回全国研究大会

ZPDは「発達の最近接領域」。高校体育実践、教科保健実践、障害児体育実践から、発達の最近接領域を、実際事例に基づき分析検討。体育実践、障害児教育実践は教師

教育実践記録等

の働きかけと子どもの発達の相互関係が目に見える形で提示され、ZPDを具体的に考察できる利点があることを示す。音楽教育や教育実践演習には共通点が多く、一般化し適用できる。教育は教師の発達が子どもの発達を規定している。教育実践研究を通して将来の教師が自らの発達の最近接領域に気付いてくれることが隠しテーマである。

■喜連環濠地区史跡案内板の執筆(2014(平成16)年7月～2015(平成17)年3月順次完工)

喜連環濠地区まちづくり研究会の事業として、同地区7ヶ寺、7口の地蔵堂、地域の学校、幼稚園、古民家等計20か所の案内板を設置。寺・地蔵・環濠・街道・古民家・地名等の個々の史跡の来歴と地域史概説等を案内板に執筆。各寺院チームや地蔵講との共同研究で、地域の歴史を共に掘り起し・記述するムーブメントとしての側面を重視しつつ、すべての案内板を回れば、外来者や子どもたちが、実物と照らし合わせながら喜連の通史を概略理解できるように全体設計した。2013(平成15)年度より喜連地域にある常磐会学園大学の教職特別講座として小学校郷土史授業づくりのフィールドワークもふたコマ担当しており、案内板はこの教材の一環でもある。喜連環濠地区まちづくり研究会は大阪市のまちづくり認定団体。案内板全記事と画像を加えた詳解記事は大阪市平野区HPに掲載。

■『「芸能教科」技術指導論—体育の場合』2014(平成16)年2月大阪音楽大学教育研究論集

日本では芸事の伝授はお師匠さん方式で行われてきた。感性や感覚が大きい世界を占める音楽やスポーツの技術指導では、指導者の技術観が貧弱なほど、権威主義が入り込みやすい。時には体罰まで伴う体育指導のケースを批判的に検討しながら、技術を技能・スキル・戦術・戦略の相で分けて客観的に捉えること論じ、また近年の日本サッカーの躍進を支えるコーチング学を事例的に考察して、音楽指導の参照に供する。

■『発達障害こそ子ども理解の鍵』旧姓榊原義夫名で発表(共著)2006(平成18)年学校体育研究同志会『たのしい体育・スポーツ』創文企画(東京)刊No.193、7頁
特別支援教育制度の翌年度実施を控え、足許から制度のあり方を考える特集を企画・編集・執筆。制度の上でも障害の実情からも、健常と障害をリンクする発達障害者の実践的・制度的処遇こそが、日本の障害児教育・特別支援教育の今後を決めていくことを述べる。発達障害者は従来の「特殊」と「普通」をリンクする存在である。正しい発達障害児観がノーマライゼーションをめざす実践の鍵といえる。

■『特別支援教育をアセスメントする』旧姓榊原義夫名で発表 2006(平成18)年大阪市養護教育諸学校教育研究会

特別支援教育検討委員会委員長としてまとめる。特別支援学校へのカウントダウンが始まる中で、自閉症スペクトラム(連続体)と包括される発達障害児の特性の把握、その手法、支援法の開発のための課題整理と校内体制づくりを提起。発達障害児への特別支援は一般校普通学級での処遇が前提であり、現場教師になったら即応を迫られる極めて今日的・社会的実践的課題である。

■『特別支援教育の現在ありのまま―校内研修会Ⅳ・Ⅴ及び共同研究費他校研究班調査総括レポート―』旧姓榊原義夫名で発表 2005（平成17）年大阪市立難波養護学校『紀要なんば』

とりわけ知的障害養護学校には従来から自閉症児が処遇されてきたが、教員にはカナー型の典型例のみが自閉症と認識されており、自閉性の程度が軽いものについては、知的障害の範疇で経験的に処遇されてきた。2005（平成17）年の時点においては養護学校の教員すら知的障害と自閉性障害と発達障害の概念的な区別や関連が十分認識されていたとは言い難い。知的障害養護学校研究相談部長の立場から、府下各自治体での制度移行の進捗状況の把握と、一般校普通学級・通級での先進的取り組みとの比較により、自校の課題を析出する。

■『知的障害児の運動発達を引き出す学習環境づくり―走運動のアフォーダンス論（生態知覚論）的アプローチ―』旧姓榊原義夫名で発表2005（平成17）年大阪市養護教育諸学校研究会実践交流会・運動発達分科会

2年のスポーツテスト50m走で1年時より5.4秒タイムを短縮した生徒がいた。白線で引いたスラロームの50mコースを走らせた時のことである。学年平均でも0.7秒の短縮が見られた。低学年、遅進者には一般校でも常識に反してこのような現象がみられる。当該の生徒は自閉症児である。スタートラインとゴールラインだけで示される50m走空間は実は捉えにくい。曲走路はラインを引かないと描けない。実は曲走路の方が視覚支援され認識しやすいのである。スポーツ場面ではこのように対象物の提示の仕方（見え）によって大きくパフォーマンスが変わる。これまでの自らの実践で見出された現象と教材開発の歩みをアフォーダンス論により体系づけて説明を試みた。教育実践の主要な働きかけの対象である教材と子ども、その双方への研究の深まりから、指導法への新たな着眼を得た報告。

■『体育実践とアフォーダンス論の可能性』旧姓榊原義夫名で発表2005（平成17）年学校体育研究同志会『たのしい体育・スポーツ』創文企画（東京）No.175、24～27頁
榊原の障害児学校、高校での体育実践事例をアフォーダンス論から理論化。高校生短距離走遅進者が曲走路で速くなる。障害児や低学年では様々な曲走路による「平面障害物走」が子どもに走る意味を与え、疾走の相が出現する。小学校で普及し始めた「平面障害物走」は榊原のアフォーダンス論的アプローチから開発された教材である。様々な時間的技術の空間化（可視化）が、飛躍的なパフォーマンスの向上に繋がるなどを示唆する。自閉症スペクトラムへの視覚支援などの指導を内包し、健常者まで一般性が広い。

■『福祉基礎構造改革（利用制度移行）時代の知的障害養護学校校内実習のあり方についての考察』旧姓榊原義夫名で発表 2002（平成14）年（財）日本教育公務員弘済会大阪支部教育賞論文。優秀賞受賞。

養護学校進路部長として、自立支援法の制定、特別支援学校制度の準備など障害児教育の構造改革が進む中での校内実習の在り方と改革を、実践に基づき提起。就労支援施設・大阪市立作業所と業務提携し実習材料を調達。作業所利用者の作業能率を目安とし

その他	<p>て生徒のあらゆる作業の定量化を試み、客観公正な進路指導に供する。障害児を担当した場合、階梯ごとに進路選択の指導が大きな課題してと待ち受ける。障害児の進路指導という重い課題に社会的な視野を持って向き合う手掛かりを示す。</p> <p>なし</p>
-----	---



増井 一友（ますい かずとも） 講師

担当科目

教職実践演習（中・高）

所属・職位	同志社女子大学 講師
学位	—
学歴	1976（昭和 51）年 大阪芸術大学音楽学部音楽学専攻中退
主な職歴	1977（昭和 52）年～1980（昭和 55）年 関西電力学園 社外講師 1980（昭和 55）年～現在に至る 大阪音楽大学 講師 2013（平成 25）年～現在に至る 同志社女子大学 講師
専攻（専門分野）	ギター
担当科目	教職実践演習（中・高）
研究テーマ	集団授業におけるギターの活用
教育方針	学生が音楽全体の観点からギターを見つめ、表層ではなく根本での理解を深められるよう指導したい。
所属学会・団体等	—
最近の業績	<p>■『授業におけるギターの指導について』2014（平成 26）年 2月大阪音楽大学教育研究論集</p> <p>学生の楽器への興味を学問的な知識だけではなく、その演奏技術の向上と深く持てるように指導している。</p> <p>例として、楽器の持ち方や奏法では、歴史的な楽器の形状の変化やそれに伴う保持スタイルの変化と音楽の変化など、実践と学術的な面を同時に示し、より深い理解を求める。</p>
教育実践記録等	
その他	

また歴史的な音楽の変遷だけでなく、現代の実際の音楽現場で使われている演奏スタイルも示し、広汎な観点からギターの特徴を理解出来るよう指導している。

教育分野に詳しいギター演奏家は数少ないが、その上あらゆるジャンルで活動している利点を教育内容に盛り込んだ指導実績を持つ。教室で多人数を対象にギター演習を行う際は常に効率向上に努めている。

■ 2015（平成 27）年 2 月 増井一友ギターコンサート Vol. 14

■ 2014（平成 26）年 6 月 増井一友リサイタル（兵庫芸術センター小ホール）

■ 2011（平成 23）年 増井一友ギターコンサート Vol. 3

■ 2010（平成 22）年 増井一友ギターコンサート Vol. 1

リサイタルシリーズ第 1 回。年に 4 ヶ月ごとに 3 回行うリサイタルシリーズの 1 回目。

■ 2010（平成 22）年 ホセ・ルイス・ゴンサレス追悼コンサート 主催：アルコイ市
アルコイ出身の巨匠ギタリスト、ホセ・ルイス・ゴンサレスの追悼コンサートに弟子として出演。
共演：藤井 浩

■ 2009（平成 21）年 増井一友リサイタル「内なる想い」

■ 2009（平成 21）年 大阪クラシック 2009

大植英次プロデュース、御堂筋界限で一週間で 100 公演開催するイベント

主催：大阪クラシック実行委員会(大阪市、大阪フィルハーモニー協会地)

協力：大阪音楽大学他